

そよ風通信

第3号

2020年6月発行

〒480-0392 愛知県春日井市神屋町713-8 TEL/0568-88-0811 FAX/0568-88-0839 <https://www.pref.aichi.jp/addc/>



新総長ごあいさつ

愛知県医療療育総合センター総長

石黒 直樹

この度、4月から安藤総長の後を受けて、新総長を拝命した石黒直樹です。

簡単に自己紹介させていただきます。私は名古屋生まれの整形外科医です。整形外科という診療科目はパリ大学ニコラス・アンドレイが小児の障害を治療・予防することを目的に始めました。

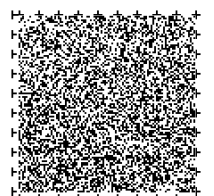
それが幾多の変遷を経て今の形になったのです。いわば小児の障害克服、療育というのは整形外科のルーツとも言うべき領域です。残念な事にヒトは完璧な生き物ではありません。色々なことが原因で障害を負ってしまうことがあります。アンドレイはそれを理解し、当時としては革新的な発想のもとに整形外科学を興しました。彼が目指したのは障害の克服です。同時に成長に伴う療育の重要性にも着目しています。この整形外科発祥の領域で整形外科医である私が役割を得た事に非常に感謝しています。微力ですが少しでも皆様の役に立ちたいと祈念しています。

障害のある方々にとっても個人の幸せを追求するという極めて基本的なことは重要です。様々な障害をお持ちの方に寄り添い、その中で個人の幸せを追求することのお手伝いをすることが非常に重要であると思います。この基本的人権を保障し、支援することがこのセンターの役割と考えます。

昨今の在宅・地域移行という流れの中で障害のある方々と介護者を支える組織の在るべき姿を皆様と共に創っていきたいと思います。

Contents

総長あいさつ	1
新任職員紹介・病棟紹介（子どものこころ1病棟）	2・3
医療安全管理室の活動・ケースワーカーの仕事	4・5
発達障害研究所の仕事	6・7
Topics	8



新任医師・研究員紹介

今年度中央病院、発達障害研究所に着任した3名です。よろしくお願いいたします。



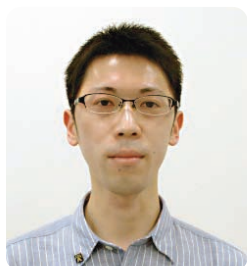
高里 文香先生
(小児心療科)

4月より子どものこころ科に赴任しました。今まで愛知県精神医療センターの精神科に勤務しておりました。成人の診療に主に従事していたので、家族への関わり方や福祉サービスの活用も含めて、子どもの診療ができるように努めて参ります。色々ご迷惑をおかけすると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。



見松 はるか先生
(小児神経科)

4月より小児神経科に赴任しました。今まで様々な地域の病院に勤務しておりましたが、幼少期から長く過ごした高蔵寺にある愛知県医療療育総合センターへ赴任させて頂き、とてもうれしく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



西條 琢真先生
(発達障害研究所)

この度、発達障害研究所の分子病態研究部門の研究員に着任しました西條琢真と申します。この分野では初心者になりますが、これまでの研究経験を活かしつつ、発達障害研究の発展に貢献していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

中央病院病棟紹介

「発達障害を持つ子どもと家族への支援」

～子どものこころ1病棟(小児心療科病棟)の取り組み～

子どものこころ1病棟師長 鵜飼 秀明

子どものこころ1病棟は知的な遅れを伴わない発達障害（注意欠陥多動症、自閉スペクトラム症など）や、被虐待経験などにより行動に問題が現れる児童思春期の子ども達が入院する病棟です。

最近では新聞やテレビなどで発達障害が多く取り上げられるようになり、社会での認識が高まっています。その発達障害ですが、生活障害のあらわれ方はその子どもごとに様々です。例えば同じ不登校でも、多動で落ち着きがないため離席して、授業についていけず不登校になる子どももいれば、強いこだわりや感覚過敏で集団行動ができず不登校になる子どももいます。入院生活を通じて、子どもの苦手なこと、得意なことを観察し、特性に合う対処法や薬物調整、気持ちのコントロールの練習など、多職種（医師、看護師、心理士、精神保健福祉士、教諭など）で検討します。そして、病棟で練習した対処法を外泊中におこないます。また、家族へも対処法を伝えます。退院前には地元学校とカンファレンスをおこない、入院中の対処法や、院内学級での様子を地元学校や地域に伝え、退院後の環境調整に役立てています。



天気のいい日は中庭でシャボン玉やバドミントンをして遊びます

中央病院には隣接する春日台特別支援学校の先生方の協力のもと、けやき学級という小児心療科専用の院内学級が併設されています。小児心療科病棟に入院しながら、院内学級で毎日義務教育が受けられる県内唯一の病院です。入院前は生活のリズムが乱れ、不登校だった子ども達が、自分のペースに合わせて登校練習をします。学習の遅れがある子どもが多いため、院内学級の先生方と情報交換しながら支援をしています。また、学校のない夏休みには、イベントプログラムを通じて様々な体験をして、安全・安心な環境のもとで、治療と教育を両輪とした成長の場を提供しています。

発達障害を持つ子どもは触られることを嫌がったり、あやしても泣き止まなかったりすることから、育てにくく虐待を受けやすい傾向があります。困難を感じる育児は喜びが少なく、家族も自信を失い、自尊感情が低下してしまいます。そして、家族の不安は子どもへも伝わります。なので、小児精神医療には家族支援が欠かせません。子ども、家族ともに、安心なくして心の成長はありません。子どもと家族へ安心感を提供できる病棟を目指し、家族に寄り添い、時に社会資源を使いながら支援をしていきます。



気持ちの切り替えを練習する部屋（コントロールルーム）があります

医療安全管理室の活動

医療安全管理室には医療安全管理担当者と感染管理担当者が在籍しており、それぞれ院内の医療安全管理と感染管理を担っています。患者さまやご家族さまに直接関わることは少ないですが、安心・安全な医療を提供するために、また医療従事者が安心して働くことができるように、当院の医療の質を支えています。簡単ではありますが、それぞれの仕事についてご紹介いたします。

医療安全管理

専従リスクマネージャー 佐藤 佳子



医療安全管理部門は中央病院の基本理念に基づき、医療事故の発生を防止するために必要な事項を定め、適切な医療安全管理を推進し、安全な医療の提供を目的として活動しています。主な役割は、各所属から提出されたインシデント・アクシデントレポートを専従のリスクマネージャーが集約し「何が起こったのか?」「なぜ起こったのか?」と分析しています。レポートからは読み取れない部分も多いため、各所属に出向き現場の確認もさせていただいています。また、医療安全推進活動として当院で起こったインシデントやアクシデントを啓発事象として配信したり、他院で起こったアクシデントや医療事故調査支援センターからの情報を各所属に配信したりと情報共有に努めています。また、患者さま・ご家族さまからの医療安全に関する相談の支援なども行っています。

患者さま・ご家族さまが安心して医療を受けていただくため、また、スタッフが安心して働くことができるためにも「組織の安全文化の醸成」を促進していきたいと思えます。

感染管理

感染管理認定看護師 田口 康祐

昨年4月より、感染管理認定看護師の資格を持つ看護師1名が、専任で感染管理を主な業務として医療安全管理室で従事しています。

主な役割は、感染症や薬剤耐性菌の発生状況や感染対策の実施状況を把握、評価、改善し、医療関連感染の予防と発生時の拡大防止を図ることです。そのために、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師の多職種で構成する感染対策チーム（ICT）のメンバーとともに、院内ラウンド、研修会の開催、広報誌（ICT now）の発行など、院内の感染防止対策が適切に実施されるように取り組んでいます。



流行する新型コロナウイルス感染症の院内発生の予防、発生した場合の対応方法について、不足する感染対策物品の確保、使い方を考慮しながら、毎日ICTで検討、対策の強化を図っています。

ケースワーカーの仕事

私たちを感動と熱狂の渦に巻き込んだラグビー日本代表の選手の皆さんは、様々な場面で『コネクト=CONNECT (つなげる・つながる)』というキーワードをいつも大切にされていたそうです。それは、日々ハードワークに汗を流すケースワーカーさん達にも相通ずるものではないでしょうか。今号では、地域支援課児童精神支援グループに所属されているケースワーカー小崎さん・澤田さんのお二人にお話を伺ってみました。

- ①ケースワーカーを志したきっかけ・理由など
- ②日々の業務における苦労や達成感を感じること等
- ③その他 (PRしたい事項・今後ケースワーカーを目指される方へのメッセージ等自由に)

小崎ケースワーカー



在職歴/平成18年度～3年間、平成25年度～
(愛知県職員としては、平成18年度採用です)

- ①幼少期から障害があり、車いすを使って生活をしてきました。いろんな壁に直面した時、相談にのってくれた医療ソーシャルワーカーさんとの出会いがきっかけです。こんな仕事もあるんだなあと印象に残り、自然と夢見るようになりました。
- ②毎日たくさんの患者さんやそのご家族さんからだけでなく、病院内の医師や看護師、その他スタッフからもご相談を受けています。時にはどうやったら解決できるだろう?と頭を悩ませたり、話を聞いていて心が痛くなったりもします。それでも、院内や院外の多職種と連携して、その困りごとが解決できた時、そして「相談してよかった」と言われた時にはとてもうれしくなります。
- ③毎日たくさんの人とお話ができ、時には患者さんから元気をわけてもらうこともあります。忙しい毎日ですが、とてもやりがいのある仕事です。

澤田ケースワーカー



在職歴/医療療育総合センターは2年
(愛知県職員として精神保健福祉士歴8年目です)

- ①父が入院した際に、社会保険に関する手続きや、退院後について一人右往左往し、大変苦勞しました。その数年後、自分が困っていたことを相談できるMSWという仕事があることを知り、是非このような仕事に携わりたいと思いました。
- ②患者さんがスムーズに地域での生活に戻れるように、カンファレンスで各関係者ができることを持ち寄り生活を支援で補強し、退院準備を進める時、うまく歯車が回り出したように感じ、うれしくなります。
- ③ケースワーカーは、勤務が変わっても、続けることで関係者とのつながりが広がり、仕事もしやすくなるように思います。どこへ行っても経験は生きる仕事だと思います。

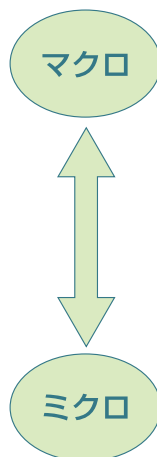
今日もそして明日も、ケースワーカーの皆さんは、医療療育総合センター内を駆け巡っていることでしょう。

小さな命をつなぎ、支援者たちの思いをつなげ…。そして笑顔あふれる未来へとつなぐために。

発達障害研究所の仕事

発達障害を微視的（ミクロ）レベルから巨視的（マクロ）レベルまで5つの階層に分け、それぞれに対応する5部門が研究を進めています。部長・室長を含めた研究員の定員は30名です。この他に様々な事務系・技術系職員（リサーチレジデントや研究助手、アルバイト職員等）が、研究支援部門を加えた6つの部門に分かれて働いています。

以下で各部門の活動を紹介します。



5つの階層と対応する研究部門

5. ヒト～社会：障害システム研究部
臨床生理的、臨床画像的な発達障害者の異常解明、社会的支援システムの研究を行う
4. モデル動物：障害モデル研究部
障害モデル動物の作成と解析、行動異常等の個体レベルでの異常解析と改善方法の探索を行う
3. 細胞～臓器（脳）：細胞病態研究部
機能分子の異常により引き起こされる神経系細胞や脳の異常解明と修復方法の探索を行う
2. 分子（タンパク）：分子病態研究部
遺伝子異常の結果として起きる機能分子（タンパク）の異常解明と薬物療法の探索を行う
1. 遺伝子：遺伝子医療研究部
発達障害の主たる原因である遺伝子異常の解明と治療戦略の探索を行う

1. 遺伝子医療研究部（部長：林深）

人体はおおよそ数十兆個の細胞からできています。その一つ一つにはゲノムと呼ばれる遺伝情報、すなわち人体の設計図が含まれています。わたしたち遺伝子医療研究部はゲノムの変化に原因があると考えられる先天異常疾患を主な対象に、原因探索と病態解明を行っています。このような疾患には、生まれつきの身体的特徴・てんかん・発達の遅れなどが含まれます。この20年間でゲノムを解析する方法は長足の進歩を遂げ、数多くの疾患原因が明らかになってきました。まず原因となるゲノムの変化を探り、それがどのように病気につながるかを明らかにし、最後には治療方法を開発して患者さんやご家族に還元してゆくことがわたしたちの目標です。遺伝子医療研究部の今後にご期待下さい。

2. 分子病態研究部（部長：永田浩一）

自閉スペクトラム障害や知的障害をはじめとする発達障害の発症メカニズム解明と治療法開発に関する研究をしています。具体的には、センター中央病院や連携する大学などで見出された遺伝子異常がどのように臨床症状につながるのかを、特に「タンパク質の機能異常」に着目して研究しています。実験方法としては、分子生物学や細胞生物学からマウスモデルまで広く用いています。得られた成果を診断・治療の現場で活かせるよう、臨床の先生方との連携を図りながら研究を進めています。

3. 細胞病態研究部（部長：中山敦雄）

発達障害の多くは脳機能の不具合で起こります。その中には脳の形に変化が見つかるものもありますが、見つからないものもたくさんあります。しかし、脳を形成する細胞を詳しく調べると、様々な異常が見つかってきます。細胞病態研究部では発達障害に伴って起きる細胞の異常を詳細に解明し、その異常を修復する方法を探索しています。例えば、患者さんからご提供いただいた血液等から人工多能性幹細胞（iPS細胞）を作り、そこからさらに神経細胞を作ってどんな異常が起きているかを調べたり、疾患モデル動物（主にマウス）の脳から取り出した様々な神経系細胞の異常を研究したりしています。さらにその異常を改善する新しい治療法を試しています。

4. 障害モデル研究部（部長：浅井真人）

障害モデル研究部の役割は、人間の病気に似た病気をもつ動物（障害モデル動物）を用いて調べることです。人間の病気のなかでも知的障害、てんかん、自閉症スペクトラム、低酸素脳症といった神経の病気を中心に調べています。人間の病気の原因と分かった遺伝子とそっくりな遺伝子を改変したマウスを作ったり、ラットの脳血流を意図的に下げたりして障害モデル動物を作っています。病気のなりたちが分かると、その病気になった患者の苦痛を減らしたり根本的に治療したりすることにつながります。当研究部が持つ特徴的な動物はてんかんを起こすマウスです。抗てんかん薬の候補物質を投与して長期間撮影し動画に含まれるてんかん発作の回数を解析することで候補物質の良し悪しを判定することができます。

5. 障害システム研究部（部長：乾幸二）

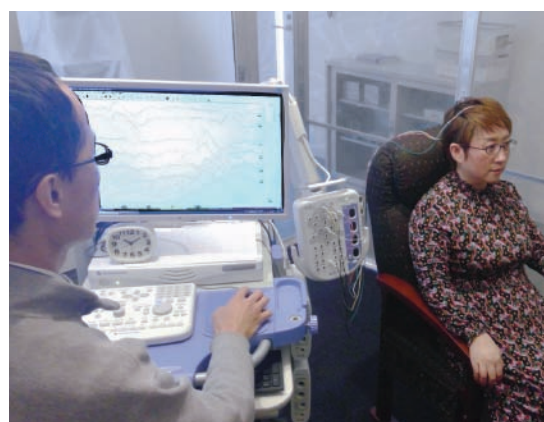
多くの発達障害では、見る、聞く、触れるといった低次の感覚情報処理から、変化に素早く対応する、注意を向ける、細かな動作を行う等の高次処理に至るまで、様々な脳の働きに変容があると考えられています。高次脳機能研究室では、身体を傷つけることのない検査法である脳波、脳磁図、筋音図等を用いて脳・神経・筋の活動を計測・解析することにより、様々な疾患における神経機構の異常を解明することならびにその知見に基づき患者さんにとって負担の少ない検査法を開発することを目的としています。教育・福祉研究室では、共生社会のさらなる実現や、心身の発達に障害のある人たちのクオリティ・オブ・ライフの向上につながる研究を行います。現在は主に、障害児・者への地域医療に関する医学教育や、文化芸術分野への障害児・者の参画方法等について、実態やあり方を研究しています。

6. 研究支援部門：研究企画調整科（科長：永田浩一）

研究企画調整科は研究所の事務運営の中核です。業務は多岐にわたり、庶務、経理などの他、特に重要なのは外部資金（文部科学省や厚生労働省の科学研究費及び各種研究助成金）の管理です。研究所のメンバーが研究業務に専心できるようにアドバイスも行い、陰に陽にサポートをしています。



遺伝子医療研究部での実験中の様子です



障害システム研究部での職員を被験者にした脳波測定実験中の様子です。モニターに脳波波形が見えます

Topics

～はるひの家編～

音楽を楽しむ集い♪



この日は、高校生ボラ「インターアクト」の方も参加して楽しみました



ウインドチャイム

はるひの家では、月1回ボランティアさんによる「音楽を楽しむ集い」を開催しています。ボランティアさんのキーボードとコントラバスの演奏に合わせて、太鼓やタンバリンや鈴を鳴らしてリズムを感じたり、普段あまり触れることのないウインドチャイムなどの楽器を体験したりします。

皆さんとてもいい笑顔で音楽を楽しんでいます。

～こばと棟編～

受賞おめでとうございます！



今回で6回目の開催となる、障がいを持った人たちの展覧会「むがむちゅう展」に出展した荻谷一恵さんの作品が、見事奨励賞を受賞されました。

今年の作品のタイトルは「センターふれあいフェスティバル」。昨年9月末、医療療育総合センターになって初めて開催されたフェスティバルの舞台上で踊る仲間たちの様子が色鮮やかに描かれています。

以前は体勢を整えれば自分の力で絵を完成することが出来ていましたが、現在は職員やボランティアのサポートを受けながら一つの作品を作り上げています。

後日行われたお祝い会には、副院長、看護部長、看護副部長をはじめ、他病棟の利用者、職員も参加し、沢山の人たちから祝福を受けました。

施設で暮らしながらも社会参加、自己実現を叶える荻谷さんから、多くの人が力をもらうことが出来たお祝い会となりました。



受賞した作品を持つ弟さんと荻谷一恵さん